

ロンドンの漱石と二人の化学者

小山 慶 太

はじめに

夏目漱石を語る上で、一九〇〇（明治三三）年から二年間の英国留学は、重要な時期として注目されている。中でも、ライプチッヒ大学での留学生生活を終え、ドイツからロンドンに立ち寄った化学者池田菊苗との出会いは、暗澹たる思いで異郷の日々を過していた漱石に、その後の活路を見い出すきっかけを与えたことが知られている。菊苗は漱石より三歳年長で、当時は東京大学助教授。帰朝後間もなく教授に昇進し、後で登場する師の桜井錠二とともに、日本の物理化学の基礎をつくった科学者である。あるいは、味の素の発見者と書いた方がわかりやすいかもしれない。

さて、漱石と菊苗の交流は、菊苗がロンドンの漱石の下宿を訪れた一九〇一年五月五日から、菊苗が帰国の途に着く同年八月三十日までの四ヶ月足らずに過ぎないが、出会う早々互いに意気投合し、親交が急速に深まってい

た様子が、漱石の日記、手紙などからうかがえる（五月五日から六月二六日まで、二人は同宿している）。特に英文学研究の泥沼の中でもがいていた漱石にとって、世界に通用する業績をあげつつあった化学者菊苗の存在は、眩しいほどに映ったのであろう。また、掘み所のない文学に比べ、厳密、明晰な自然科学の世界に、漱石は大きな関心を抱くようになった。

池田菊苗君が独乙から来て、自分の下宿へ留った。池田君は理学者だけれども、話して見ると偉い哲学者であつたには驚ろいた。大分議論をやつて大分やられた事を今に記憶してゐる。倫敦で池田君に逢つたのは、自分には大変な利益であつた。御蔭で幽霊の様な文学をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやらうと思ひ始めた。

これは、六年後の明治四一年に發表された『処女作追懷談』の一節である。「組織だつたどつしりした研究」が、やがて『文学論』に結実したことも、よく指摘されるところである。

このように、菊苗との邂逅は、漱石の生涯で重大な転換期となったことから、留学前に面識のなかった二人をロンドンで引き合わせたのは誰なのか、よく問題にされている。これにはいくつかの説があげられているようであるが、菊苗の恩師桜井錠二（東大化学科教授）の兄房記が、留学前漱石の勤務していた熊本五高の校長であり、さらに桜井の妹が菊苗の妻であるというつながりが、二人の出会いを生んだとする考えが、もっとも自然なように思える（林太郎「池田菊苗先生の講義」、『化学史研究』13号）。

ところで、漱石と菊苗が肝胆相照らしていた時期と重なるようにして、他ならぬ桜井錠二自身がロンドンに滞在し、菊苗とも一時を過していることを示す資料が存在することに気がついた。時期を同じくして自分自身渡英することになっていたとすれば、桜井が兄の房記を通して、菊苗と漱石の仲介役をつとめた可能性はさらに高くなるものと思われる。そこで、二人の出会いのきっかけを推し量かる意味を含め、ロンドンにおける漱石と二人の化学者の行動を、この資料を通して追ってみようと思う。

化学者桜井錠二

資料というのは、『東洋学芸雑誌』明治三五年五月号より十月号までの六回にわたって連載された、桜井錠二の「欧米巡回雑記」と題する一文である。それによると、桜井は約十ヶ月の旅程で、欧米の教育機関視察とスコットランドのグラスゴー大学創立四五〇周年祝賀式典参列のため、一九〇一（明治三四）年五月三日、エンブレス・オブ・インディア号に乗り、横浜を出発した。

ここで、掲載誌の紹介をしておく、『東洋学芸雑誌』は、一八八一（明治十四）年から一九三〇（昭和五）年まで刊行された一種の啓蒙誌である。イギリスの『ネイチャー』を目標に創刊されたそうであるから、内容は自然科学が中心であったが、文芸や社会科学に関するテーマも扱われていた。おそらく、当時はまだ、科学者が啓蒙雑誌に詳しい海外旅行記を発表することは、珍らしかったように思う。その意味でも、「欧米巡回雑記」はなかなか貴重な記録といえる。事実、読んでみると、明治期における国際社会の中での日本の状況や日本人の姿が、随所に

映し出されている。また、若い頃、ロンドンで化学を学んだ桜井にとって、恩師や旧友と再会するセンチメンタルジャーニ的な色彩も一部に読みとられ、興味深い作品になっている。

さて、資料の紹介に入る前に、ここで桜井の人物像について簡単にふれておく方が、後の話が理解しやすいかもしれない。

桜井錠二は、一八五八（安政五）年八月十八日、金沢藩士桜井甚太郎の六男として生まれた。五歳の時父を失うという不幸に襲われ、幕末から明治へと移り変わる不安定な世相の中で、一家は苦労を重ねるが、教育を重視した母親の勧めにより、十一歳で金沢の致遠館という英語学校に入学、さらに七尾に設立された語学所でイギリス人学ぶ機会を得た。早い時期から英語に接する境遇に恵まれたことは、後に化学者として、国際舞台で活躍する大きな力となった。

つづいて明治四年、十三歳の折に上京、大学南校に入学した。桜井が在学中に大学南校は開成学校と改称されたが、明治九年、開成学校第二回留学生として、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジに派遣され、ウィリアムソンのもとで化学を学ぶこととなった。桜井、十八歳のときのことである。

指導教授となったウィリアムソンは、一八二四年生まれというから、当時五二歳、エーテル合成反応機構の研究で化学史に名前を残した人である。加えて、日本とのかかわりが深いことでも知られている。幕末に、伊藤博文、井上馨、山尾庸三ら五人の長州藩士が密出国、ロンドンに到着したが、彼らの面倒をみたのがウィリアムソンであった。その後も、多くの日本人留学生がウィリアムソンの世話になっている。また、明治初期にイギリスから来日したお雇い外国人教師の中には、ウィリアムソンの推薦による者も何人か含まれていた。

さて、話を桜井の留学に戻すと、彼は滞英中、早くも有機水銀化合物の研究で『ロンドン化学会誌』に論文を発表、化学者として世界の檜舞台にデヴェューしている。さらに、一八七九年にはロンドン化学会の終身会員に選ばれるという榮譽を得、一八八一（明治十四）年、五年間の留学を終えて帰国した。帰国と同時に東大講師となり、その翌年には教授に就任している。二四歳の少壮教授誕生である。この年齢にして、これだけの地位を収め、その重責を果たしたことは、もちろん本人の資質と努力に依るものであることは、言を待たない。しかし、同時にそこには、時代というものが生み出すエネルギーが感じられる。明治日本という若い国家の存立が、たとえば桜井という特定の個人の肩に、そのままのしかかっていた時代だったのである。

帰国後の研究業績としては、弟子の池田菊苗と協力して、分子量測定に用いる「桜井—池田沸点測定法」の考案などが有名であるが、桜井の功績は、どちらかと言うと、化学研究の面よりも、理科教育や科学振興などの行政面において顕著であった。当時の日本は、まず教育と研究の確固とした体制づくりが先決問題だったのである。理科教育に関しては、一八九〇（明治二三）年に発表した「化学教育上の意見」、一八九九（明治三二）年の「国家と理学」などがよく知られている。

科学振興の面においては、基礎科学研究の重要性を訴え、理化学研究所の設立に尽力、その初代副所長に就任したことがまずあげられる（一九一七（大正六）年）。また、学術研究会議、日本学術振興会の創設にも与っている。さらにその活動は国内に止まらず、留学の実績と顔の広さを活かし、多くの科学の国際会議にも日本を代表して参加している。一九二六（大正十五）年には、東京で第三回汎太平洋学術会議を主宰した。このような教育、科学行政に果たした貢献により、桜井は帝国学士院長、日本化学会会長、貴族院議員など数々の名譽を得、一九三九（昭

和十四）年、八一歳でその生涯を閉じた。以上が駆け足で眺めた桜井のプロフィールである。

「欧米巡回雑記」

それではこの辺で、桜井の「欧米巡回雑記」に目を転ずることにしよう。なお、ここでは漱石に関係しそうな箇所だけを選んで話を進めるが、桜井の詳しい欧米での足取りは、参考のため後ろの表一にまとめてある。

さて、さきほど述べたように、一九〇一年五月三日横浜を出発した桜井は、約二週間北米大陸に滞在した後、六月六日の早朝リバプールに入港、そのまま列車でロンドンに到着している。その時の心境を、桜井は次のように書いている。

倫敦は元と余の明治九年より十四年まで五年間留学せし地にして、恩恵を受けたる旧師并に親交ある同窓其他の知友多く、此地及び其附近に在りて恰も第二古郷の様に思い居たる所なるが、市中の模様等二十年以前と殆ど変りなきを見るにつけ、学生時代の昔日を思ひ出して愉快き限りなかりき。

他人ごとながら、二十年振りに、青春時代を過した思い出の地を訪れたとき、桜井の胸に込み上げる懐しさは如何許りであったかと思う。特に、短時間で手軽るに海外へ出掛けられる現代からは想像もつかない明治という時代にあつて、その思いはなおさらであつたろう。

このとき、菊苗の方は、丁度一ヶ月前から漱石と同じ下宿で、ロンドンの生活を始めていた。当時の二人の打ち解けた交流振りは、六月十九日、ベルリンの藤代禎輔に宛てた漱石の手紙からも察せられる。

目下は池田氏と同宿だ。同氏は頗る博学な色々の事に興味を有して居る人だ。且つ頗る見識のある立派な品性を有して居る人物だ。然し、始終話し許りして勉強をしないからいけない。近い内に同氏は宿を替る。僕も替る。

夜を徹して話し込む二人の姿と、菊苗に対する漱石の心酔振りが目に浮かぶようである。そして、その折、菊苗の口から、師桜井のロンドン到着が話題にのぼったかもしれない。

一方、桜井は六月六日の到着早々、忙しい思いで滞英生活をスタートさせた。まず、その日のうちに公使館に出向き、グラスゴー大学のケルヴィンに日本政府が贈ることになった勲章（瑞宝一等）を、林董公使に届けている。ケルヴィンは、絶対温度の単位〔K〕に名前を残した十九世紀を代表する物理学者で、一八九〇年に王立協会会長、一九〇四年にはグラスゴー大学学長などの要職を歴任したイギリス科学界の重鎮である。また、桜井の師ウィリアムソンと同様、多くの日本人留学生を指導したことも知られている。その中には、桜井と同世代の物理学者田中館愛橘などが含まれている。加えて、グラスゴー大学出身の科学者、技術者を日本へ紹介、明治前半の我が国の教育振興に大きく貢献した。今回の叙勲は、ケルヴィンのこのような日本に対する功績が評価されてのことであった。同時に、グラスゴー大学の創立四五〇周年に花を添えようとした日本政府の思いも籠められていたのであろう。

ところで、ケルヴィンに贈呈する勲章を無事送達した桜井は、逆に公使館氣付で届けられたグラスゴー大学からの書状を受け取ることになる。それは、同大学の記念式典に際し、桜井に法学博士の名誉学位を授与する旨の通知であった。そのときの驚きを、桜井は「欧米巡回雜記」の中で、次のように綴っている。

グラスゴー大学よりの通知書に対しても、余の驚愕亦た一方ならざりしなり。蓋し法学博士の名誉学位(D. L.)は、極めて貴重なるものにして、欧米諸国に於ても、之を有せるものは有数の大家に限られ、余の如き浅学者の夢にだも其授与を望むべからざるものなればなり。故に、余如何に鉄面皮なりといへども、之を甘受すべからざるを知り、直ちに辞退の書面を認めんとせり。併しながら、再三熟考せしに、此の学位授与は余の爲にあらずして、余の代表せる我東京帝国大学の爲に、グラスゴー大学が好意を表せるものなるを思ひ、其の榮譽は余に属すべきものにあらずして、我大学否我帝国に属するものなるべきを悟り、遂に意を翻して、之を受ることとなし。

さきほど触れたように、桜井は生涯を通じ内外から数々の名誉を得たが、グラスゴー大学の名誉学位もそのひとつにあげられよう。それにしても、右に引用した桜井の筆遣、現代の我々から見ると、なんとも奥ゆかしいというか、頬笑ましさを感じられるように思うが、如何であろうか。なお、名誉学位の授与式は六月十三日、グラスゴー大学の記念式典二日目に行われ、イギリスの物理学者J・J・トムソン（電子の発見者、一九〇六年ノーベル物理学賞受賞）、ドイツの物理学者クヴィンケなど一流の科学者も、学位受領者の中に名前を連ねていた。

さて、ロンドンに到着した翌六月七日、桜井は、ロンドン郊外のヘーズルメーヤに、留学時代の恩師ウィリアムソンを訪れている。七七歳の高齢に達した師との、二十年振りの再会の模様は、次のように描かれている。

「ウィリアムソン」博士は夫人に扶けられて、態々余を玄関まで迎ひ出でられたり。親の如き恩師と其の夫人とに、二十年の久振りにて再会せし其時の余の嬉しさ懷しさ禁ぜんと欲するも能はざりしなり。博士も亦両眼を湿はせつ、余を抱き寄せて接吻せん計りに喜ばれ、其情愛の濃かなること親子の間も、啻ならざる程に感ぜり。

大任を担ない、過密スケジュールに追われるこの旅行において、ウィリアムソン夫妻訪問は、桜井にとって最も心休まる楽しい一時だったものと思われる。またそれだけに、かつて幸わせな実りある留学生活を享受したことが、右の一文やさきほど引用したロンドン再訪の印象を綴った一節から伝わってくる。どちらが平均的かという議論はともかく、『文学論』の序文に「倫敦に住み暮したる二年は尤も不愉快の二年なり」と書き記した漱石と、ロンドンを第二の故郷と懐しむ桜井の心境は、あまりに対照的である。

さて、桜井は準備を整え、六月十日、ロンドンを発ってグラスゴーに到着した。今回の渡航の主目的であるグラスゴー大学創立四五〇周年記念祝賀式（六月十二日～十五日）出席のためである。なお、同地での止宿先は、一八七三（明治六）年から八二（明治十五）年まで工部大学校の初代都俣（校長）をつとめ、日本の工學教育の礎石を築いたダイヤーの自宅であった。式典終了後、エジンバラ、ダンジューをまわり、桜井がロンドンに帰着したのは、六月二十日であった。

この日から大陸旅行に出発する八月十二日までの約一ヶ月半、桜井はロンドンを根據地として活動することになる。菊苗と行動をとにしたのも、この時期であった。その様子は、次のように書かれている。

倫敦のデイヴィ・フアラデイ研究場は、専ら物理学及化学上の事項を研究せんとするものに便宜を与え、以て之を奨励し、斯学の發達を図らんが爲めに、モンド氏私財を投じて之を設立せしものにして、之れに入らんと欲する者は、国籍の如何に係ることなきも、既に充分の学力を有し學術研究を遂行し得べきものに限られたることなるが、別に入場料の如きものを徴することなきのみならず、設備も充分にして、器械等は自由に之を使用するを得て重宝なること此上なし。理学士池田菊苗氏は先にライプチヒを去りて当地に來り、同場に於て研究中なりしが、余は同氏及び場長スコット博士の案内にて、一日之を參觀せり。

又、一日余は池田氏と共にバーミンガムに旅行し、新大学に其総長たる旧師ロッヂ博士とフランクランド教授とを訪ね、之を參觀せしが、大学の新設なると夏期休業に際せしとにより、余り見るべきものなかりしは遺憾の至りなり。(傍点引用者)

デーヴィー・フアラデー研究所というのは、桜井の紹介にもあるように、個人の寄附によって一八九六年王立研究所の中に設置された実験施設で、研究者に広く開放されていた。菊苗はロンドン滞在中、ここで化学の研究を行っていたのである。なお、漱石も菊苗と連れ立って、この王立研究所を訪れたことを、五月六日の日記に書き残している。この日は菊苗がロンドンに到着した翌日であるから、地理不案内の菊苗のために、漱石が同行したのであ

ろう。

ところで、桜井は菊苗と会った正確な日付を書いてはいないが、さきほど述べたように、これが六月下旬から八月上旬の間であることは間違いない。このとき菊苗は下宿を移っていたものの（六月二十六日）、カーライル博物館見学（八月三日）などを含め、相変らず漱石と菊苗の間には、頻繁な往来が続いていた。また、桜井滞英中に、漱石は桜井の兄房記とも何回か手紙の遣り取りを行っている。

さて、桜井は八月十二日、ロンドンを後に大陸へと出掛けて行った。一方、菊苗は八月三十日、漱石に多大な知的興奮を与えて帰国の途に着いた。この日の漱石の日記には、「[Albert Dock ニテ Sweet, 池田、呉三氏ヲ送ル]と記されている。その余韻覚めやらぬ九月十二日、漱石は寺田寅彦に宛てかなり長文の手紙を書いている。次に紹介するのは、その一節である。

学問をやるならコスモポリタンのものに限り候。英文学なんかは椽の下の方持。日本へ帰つても英吉利に居つても、あたまの上がる瀬は無之候。小生の様な一寸生意気になりたがるものゝ見せしめには、よき修業に候。君なんかは大に専門の物理学でしつかりやり給へ。本日の新聞で Prof. Rucker の British Association でやつた Atomic Theory に関する演説を読んだ。大に面白い。僕も何か科学がやり度なつた。此手紙がつく時分には、君も此演説を読だらう。

つい此間、池田菊苗氏（化学者）が帰国した。同氏とは暫く倫敦で同居して居つた。色々話をしたが、頗る立派な学者だ。化学者として同氏の造詣は僕には分らないが、大なる頭の学者であるといふ事は確かである。同氏

は僕の友人の中で、尊敬すべき人の一人と思ふ。

引用が少し長くなったが、菊苗との交流を通し、漱石の科学への関心が多いに触発されたことが、ここからもうかがえる。ところで、この手紙の中に、漱石、菊苗、桜井の接点を探るひとつの手掛かりがある。それは、漱石が面白いと書いた「英国科学振興協会 (The British Association for the Advancement of Science) のリュッカー教授 (Prof. Rucker) の講演」である。この協会は、科学の振興と普及を目的として一八三一年に設立され、毎年一回年次大会を開いていた。一九〇一年は九月十一日より十八日まで、グラスゴーで大会が催されている。寅彦宛の漱石の手紙は、その記事を読んだものであった。

一方、大陸旅行を終えて九月上旬再びロンドンに戻って来た桜井は、同協会からの招きを受けてグラスゴーの大会に参加し、請われて自らも「化学教育上の意見一二 (Some Points in Chemical Education)」と題する講演を行っている。また、漱石が関心を示したリュッカーの原子論 (Atomic Theory) に関する講演を、「欧米巡回雑記」の中で、

ルッカー教授は有名なる物理学者にして、初日の総会に於ける夫の演説は、理化学の根本的理論に説き及ばし。殊に原子説の確実なるを論ぜるもの。

と紹介している。この講演の詳しい内容は別のところで論じたので〔漱石と原子論〕、『科学と実験』一九八三年

十月号)、繰り返しは避けるが、当時は、科学の歴史において大きな転換期を迎えつつある時代であった。一九世紀末、X線をはじめとする各種の放射線、電子などが発見されたのを皮切りとして、物理学者の関心が徹視的世界へと向けられ始めていた。そこで、原子の実在性や構造が重要な問題としてクローズアップされていたわけである。リュッকারの講演には、このような時代の背景があり、桜井もまた、それを意識しての紹介となったのである。

ここでもう一度、寅彦に宛てた漱石の手紙を思い出していきたい。今述べたように、原子論は当時、物理学の最先端の話題である。そのようなきわめて専門的な内容に関する記事にわざわざ目を留め、さらにそれが大いに面白いなどと、多少背伸びしたととれる手紙を漱石が書いたのは、ある程度の予備知識があったからではないだろうか。

つまり、こういうことである。桜井が漱石と菊苗の仲介に一役買ったとすれば、時期を同じくして桜井がロンドンに來ていることが、漱石と菊苗の度重なる語らいの中で、話題にのぼったと考えるのは自然であろう。そこから、九月に科学振興協会の年次大会が開かれること、さらに原子論がこれからは重要なテーマになることを、漱石は菊苗から知らされたのではないだろうか。リュッকারの原子論を鍵に、漱石の手紙と桜井の「欧米巡回雑記」の間をつなぐと、以上のような可能性が浮んでくる。

おわりに

最後にもうひとつ漱石の手紙を紹介しよう。九月二十二日、妻鏡に宛てたものである。

近頃は、文学書は嫌になり候。科学上の書物を読み居候。当地にて材料を集め、帰朝後一巻の著書を致す積りなれど、おれの事だからあてにはならない。

寅彦宛の手紙同様、ここからも、科学に対する関心著しいことがよくわかる。何か突然目が開かれたといった印象を受ける。

さて、年が明けた一九〇二（明治三五）年一月十九日、桜井は日本郵船の阿波丸で、ロンドンから帰国の途に着いた。日英同盟条約成立（一月三十日）直前のことである。この頃、漱石は一人下宿にこもり、鏡宛の手紙に記したとおり、『文学論』の草稿を練り始めていたのである。

表一 桜井鏡二の足取り

一九〇一（明治三四）年

五月三日 エンプレス・オブ・インディア号にて、横浜を出発。

五月十五日 早朝、バンクーバーに到着。清水領事より領事館において昼食のものをなしを受ける。午後一時、汽車でバンクーバーを出発。

五月二十日 夕方、パッファローに到着。

五月二二日 パッファローを出発、イサカに到着。

五月二二日 同市郊外のコーネル大学を参観、化学教室主任バンクロフト教授と会談。夜、汽車でイサカを出発。

五月二三日 朝、ニューヨークに到着。コロンビア大学を参観。

五月二四日 ニューヨークを発ち、ワシントンに到着。

五月二五日 ワシントンの国立国会図書館を見学。ボルチモアに立ち寄って、ジョンズホプキンス大学を参観。夜、汽車でボストンに到着。

五月二六、二七日 ボストン近郊のセーレムにモース（元東京大学教授、大森貝塚の発見者）を訪問。モースの案内で、ボストン美術館を見学。その後、ハーバード大学化学教室を訪問、主任教授リチャードの案内で実験施設を見学。ひきつづきマサチューセッツ工科大学を訪問。

五月二八日 ニューヨークに帰着。トリブラ液体空気株式会社を見学。

五月二九日 チュートニック号にてニューヨークを出発。

六月六日 早朝、リバプールに到着。列車でロンドンに到着。公使館を訪問、ケルヴィン（イギリスの物理学者）に日本政府が贈る勲章（瑞宝一等）を、林董公使に届ける。帰路、ケルヴィンを訪問。さらに、ダイバース（元帝国大学化学教授）を訪ねる。公使館気付の手紙二通（恩師ウィリアムソン夫人の手紙とグラスゴー大学より名誉法学博士授与の通知）を受け取る。

六月七日 ロンドン郊外ヘーズルメーヤにウィリアムソン夫妻を訪問、二十年ぶりの再会。

六月十日 ロンドンを出発、グラスゴーに到着。ダイヤー（元工部大学校都検）宅に止宿。

六月十二日 この日より十五日まで、グラスゴー大学創立四五〇周年記念祝賀式が開催。午前十時半よりグラスゴー市内の寺院にて記念祈禱式。午後二時半より大学のビュートホールで大学総裁（副総裁ストーレ博士

（代行）の各国代表員引見並びに祝文進呈式。午後八時半よりクイーン・マーガレット校において夜会。午後十一時より大学倶楽部での学生唱歌会にそれぞれ出席。

六月十三日 午前十時よりビュートホールにおけるケルヴィンの講演「ジエームズ・ワット伝」、スマート教授の講演「アダム・スミス伝」に出席、次いで名誉学位授与式に参列、名誉法学博士の学位を受ける。午後三時より新築植物学科校舍落成式。午後四時より植物園にて園遊会。午後九時半よりビュートホール図書館と博物館で開かれた夜会にそれぞれ出席。

六月十四日 午前十一時半よりヤング教授の講演「ウィリアム・ハンタ（解剖学者）伝」、次いで音楽会。午後三時より茶話会。午後七時より市庁にてグラスゴー市長主催晩餐会にそれぞれ出席。

六月十五日 クライド海峡の船旅に参加。祝賀式終了。

六月十六日 十九日 グラスゴーを發ち、エジンバラに到着、同地でノット（元理科大学物理学教授）を訪問。

ノットの案内で、大学、工業学校を見学、エジンバラを發ち、ダンジーに到着。ユニバシティ・カレッジ化学教授ウォーカを訪問。

六月二十日 ダンジーを發ち、ロンドンに帰着。ロンドン化学会に出席。

六月二十一日 八月十一日 この期間ロンドンを根據地として行動。

●万国理學文書目録編纂会中央局を訪問、旧同窓の局長モーレ博士と再会。●デーヴィー・フアラデー研究所を訪問。所長のスコット博士、池田菊苗の案内で、同研究所を見学。●池田菊苗とバーミンガムへ旅行。同地の新大学に総長で旧師のロッジ博士とフランクリン教授を訪問。●マンチエスターへ行き、オーウェン・ス・カレッジに旧友ディクソン教授を訪問。●カージフへ旅行、開成学校時代の旧師アトキンソンと再会。

八月十二日 九月初旬 この期間、大陸旅行。

●ライデン大学をフランシモン教授の案内で見学。●アムステルダムで、コーヘン博士の案内により大学、博物館などを見学。●ハンブルクからノルウェーへ出発（八月二十日）。ノルウェーに約一週間滞在、その間に、クリスチアンサン大学のゴールドシュミット教授を訪問。さらにストックホルムにアレニウス（一九〇三年ノーベル化学賞受賞）を訪ねるが、不在で会えず。●コペンハーゲン大学を訪問、熱化学のトムゼンと

会談。●ロンドン帰着、グラスゴーへ出発。

九月十一～十八日 グラスゴーで開かれた英国科学振興協会年会に出席。同会会長リュッカー教授の「原子論」、ラムゼー教授（ロンドン大学）の「空気の不活動成分」などの講演を聴く。また、化学部会長フラン克蘭ド教授の勧めにより、自からも「化学教育上の意見一二」と題する講演を行なう。一方、会期中に、ケルヴィン、トムソン（電子の発見者、一九〇六年ノーベル物理学賞受賞）、クヴィンケ（ドイツの物理学者）などと会談。

九月十九日 グラスゴーを立ち、ロンドンに帰着。

九月二十日～十月初旬 この期間、ロンドンに滞在、新旧の知友と交流。在ロンドン日本人会に出席（公使館、領事館、海軍、正金銀行、高田商会、郵船会社、三井物産などから七十名前後の参加者）。

十月初旬～十二月下旬 この期間、二回目の大陸旅行。

●パリに約二週間滞在。パリ大学の理、医、薬学などの各分科大学を初めとする高等教育機関を視察。アカデミア・デ・シアンズの集会に出席。ベルトウロー教授を訪問、著書『炭化水素』を贈られる。●ジジヨン、ジュネーブ、チューリッヒの各大学を歴訪してローマに到着（十月二日）。翌二日、カニッツァロ教授を訪問。ローマの後、ネーブルス、フローレンス、ボローニアの各大学、教育機関を歴訪してウィーンに到着（十一月三日）。●同日、公使館の天長節奉祝会に出席。翌四日、渡辺子爵送別の公使主催午餐会において、地質学者ズユース博士と会談。さらにウィーンに二、三日滞在、大学、博物館、図書館などを見学、ウィーンの後、プラハ、ドレスデンの大学を訪問、ベルリンに到着。●ベルリン滞在中の鳩山和夫妻、伊藤博文、村岡、久原両京都大学教授に会う。ランドルト（ベルリン大学教授）、フィッシャー（同上）、ファントホフ（一九〇一年ノーベル化学賞受賞）などの化学者、コールラウシュなどの物理学者と交流。大学、工業学校の実験室を視察。●ベルリンを立ち、ライプチッヒに到着。オストワルド（池田菊苗のドイツ留学中の指導教授、一九〇九年ノーベル化学賞受賞）、ヴィスリツェーヌス（ライプチッヒ大学化学教授）、ベックマン（同上）を訪問。ライプチッヒの後、ミュンヘン、ストラスブル、ハイデルベルク、ゲッティンゲンの各大学を歴訪、ベルリンに帰着（十二月初旬）。●ベルリンで、ランドルト教授七〇歳誕生祝賀式に出席

(十一月五日)、同日夕方、オストワルド教授とともにランドルト邸へ招待される。翌六日、カイザーホーフにおけるランドルト教授の祝宴に出席。また、十日には学生による同教授の祝賀式にも出席。●ドイツの後、ブリュッセルの大学を訪問、クリスマス直前、再びロンドンに帰着。

十二月下旬(一九〇二(明治三五)年一月中旬)

この期間、ロンドンに滞在。久原京大教授をユニバーシティ・カレッジ、中央工業学院などへ案内。ロンドン市長主催の伊藤博文歓迎会、商業会議所の晩餐会などに出席。

一月十九日 日本郵船の阿波丸にて、ロンドンを出発。

三月五日 神戸に帰着。

参考文献

林太郎「池田菊苗先生の講義」、『化学史研究』第13号。

桜井錠二「欧米巡回雑記」、『東洋学芸雑誌』明治三十五年五月号(十月号)。

柴田雄次「桜井錠二先生」、『化学』第16巻4号。

小山慶太「漱石と原子論」、『科学と実験』(共立出版)一九八三年十月号。